

『大日經』における金剛薩埵の位置づけ

平 岡 龍 人

1. インド中期密教の經典である『大日經』と『金剛頂經』は、空海によって両部の大經と位置づけられたものである。両經はもともと成立した時期も場所も異なっているようである。本稿では、両經の思想的な関連性について、『大日經』の「転字輪曼荼羅行品」、「悉地出現品」、「具縁品」等を取り上げ、主にブツダグヒヤの注釈を通じて考察したい。

2. 『大日經』には、『金剛頂經』が説く“仏と一体化する四印相応の瑜伽”の思想に結びつく箇所がみられる。以下には、最初に「転字輪曼荼羅行品」の中の「一切如来の尋念」の「尋念」について述べ、次に「世尊の菩提樹下での境地」、「金剛薩埵としての阿闍梨」、「その印あるいは VA 字による加持」、「マンドラを画く条件」等について検討し、『金剛頂經』に繋ぐ『大日經』における金剛薩埵について述べてみる。

2.1 漢訳『大日經』の「転字輪曼荼羅行品」には、「時に毘盧遮那世尊は諸仏の本初不生を尋念し、自身及び持金剛者を加持して、金剛手等の上首の執金剛に告げて言わく」¹⁾とある。チベット語訳では、「時に世尊ビルシャナは、一切如来を尋念され、自身と金剛手の両者を本来不生なるものとして加持せられ、金剛手などの諸の執金剛に仰せられた」²⁾とある。この〈一切如来を尋念され〉の尋念は、チベット語訳では rjes su dgongs であるが、想念、意図などの訳語をあてる場合がある。これは如来が衆生済度をせんとする本誓、本願を想念することを指していると思える。『金剛頂經』に出てくる如来の“悲による加持にもとづいた”仏と一体化する考え、すなわち諸仏と瑜伽によって一体化する考えが、この rjes su dgongs という言葉で、『大日經』にも存在していたと考えるべきであろう。

2.2 次に同品には、チベット語訳に「私は世間第一 (loka-ādi) の世間導師 (loka-nātha) と称せられる者であり、無上にして、本来寂靜なる、無比の法を説く」³⁾、そして「時に世尊はこれらの偈頌を説かれ、この加持をもって加持したもうが故に、彼の諸の菩薩と彼の諸の執金剛は、世尊が最勝第一の菩提道場に安住し給い、

〔世尊の〕虚空の如き戲論なき無二の行境の瑜伽の相〔の故に、世尊に〕業の成熟を見る」⁴⁾とある。また「彼の阿闍梨は一切智性の門たるA字〔というもの〕に住して糸(sūtra)をとり」⁵⁾とあり、さらに「次に自身を金剛薩埵(vajrasattva)・金剛手(vajrapāṇi)として、その印か、あるいはVA字によって加持して、〔マンダラの〕内に入って、胎藏マンダラを画くべし」⁶⁾とある。また「悉地出現品」には、「また次に真言行者は瑜伽に進趣して、儀軌を知るをもつて、有情を利益せんと希って、VA字の作業をなせ」⁷⁾とあるが、これはVA字が障害を除くからである。要するに、阿闍梨がA字に住して、自身が金剛薩埵・金剛手として、「転字輪曼荼羅行品」にある金剛部の印をもつて、清浄を本質とする水で加持をなし、マンダラを画く如くに、自身が金剛薩埵・金剛手となって、その印か、あるいはVA字をもつて加持し、胎藏マンダラを画くわけである。この「その印か、あるいはVA字で加持して」という所は、『金剛頂經』の仏と一体化する瑜伽行を重要視する考えと同じものであろう。

2.3 また「転字輪曼荼羅行品」に、「同様に第二〔重〕のマンダラにおいて、またかくの如く、自身を本来寂靜(ādi-sānta)、無二の瑜伽の姿であり、如来の姿(色身gzugs, rūpa)である空性の自性と加持し」⁸⁾とあり、自身(阿闍梨)を本来寂靜、無二の瑜伽の姿である如来の姿(色身)、すなわち空性を自性とする如来の姿であると加持し、仏と一体化する如く、マンダラを画くにも、空性と無二の瑜伽行の重要性があることが説かれている。

2.4 また同品には、「次いで起きあがって、マンダラを圍繞し、内に入って、大慈と大悲の力をもつて成就者を観念して、自身をVA字で羯磨金剛薩埵(karmavajrasattva)と加持し、金剛最勝施(vajra-vara-dā文殊)とともに、大悲胎藏生マンダラを画くべし」⁹⁾とある。このようにマンダラを圍繞し、内に入って、大慈と大悲による如来の加持力によって成就者を観念し、自身をVA字によって羯磨金剛薩埵になるように加持し、さらに阿闍梨は金剛最勝施とともに大悲生のマンダラを画くわけである。これは先の偈頌にあったように、世尊是最勝第一の菩提道場、すなわち四魔降伏の道場に安住され、虚空の如き行境の瑜伽の相で業を熟され、梵天の勧請により「立ちあがり、衆生済度に趣かれた」如くに羯磨金剛薩埵となって、衆生済度のために大悲胎藏生マンダラを画くわけである。

2.5 次に「具縁品」にある「また金剛薩埵、若し彼の有情」¹⁰⁾、チベット語訳では「彼らは金剛薩埵にして」¹¹⁾を、ブツグヒヤは『大日經広釈』の中で「このように大乘を修習し終った彼ら有情の心は妙堅固(sudṛḍha)で、外道や魔などに

よって退転しないので、彼らの心は金剛に等しいことから金剛薩埵と言われる」¹²⁾と釈している。また別の箇所では、「金剛薩埵とは、心が妙堅固にして金剛に等しきものに対して言われるのであって、それはまた何故かと言えば、不顛倒にしてよく成就した相が菩提道場の心であり、それ自身が吉祥金剛薩埵の菩薩身として加持されるのである」¹³⁾と釈している。これは、最初にあげた「毘盧遮那世尊（大日如来）は諸仏（一切如来）の本初不生を尋念し」の〈尋念〉を指していると考え、すなわち釈尊は菩提樹下という菩提道場において四魔降伏し、本来不生、寂靜の智慧を悟られたが、さらに梵天の勧請によって、堅固にして不顛倒の心をもって衆生済度するという本誓を尋念されたことを指したものである。この利他行を実行する薩埵として、阿闍梨自らを、羯磨金剛薩埵として、行動する金剛薩埵として加持されたのである。またブツグヒヤは、『大日經』における金剛薩埵を、〈大乘を修習し終った彼ら有情の心が妙堅固で不退転なること金剛の如き者〉、そして〈不顛倒にしてよく成就した相が菩提道場の心であって、それ自身が吉祥金剛薩埵の菩薩身として加持される〉と釈している。すなわち如来の悲による加持によって、自身が菩薩身となって加持するわけである。これは菩提道場の心〉が、釈尊が菩提樹下で四魔降伏された時の心を指し、それゆえ大勤勇（mahāvira）と称せられたと釈しているわけである。この時の四魔降伏の真言が“A vi ra hūṃ khaṃ”であり、その種子がA・VA・RA・HA・KHAである。この真言および種子が菩提樹下における釈尊の悟りの心そのままの不顛倒なる堅固心を表わしたものと見える。これは利他行に趣く菩薩身、すなわち吉祥金剛薩埵に徹することを表したものである。

2.6 これらのことから〈毘盧遮那が諸仏の本初（本来）不生を尋念せられた〉とは、一切如来が等しく持たれている本願・本誓を尋念されたことであり、一切の者を本来不生なる者として加持することと言える。これは本来不生を悟った第一が毘盧遮那であることから、『大日經』では大日如来の種字はA（阿）で象徴される。また大日如来が阿字本不生・本来寂靜・無比の法を説く者であり、それ故に〈世間第一（loka-ādi）〉、〈世間導師（loka-nātha）〉と称せられるわけである。さらに〈本来寂靜を加持する〉とは、加持によって空性を自性としている如来の色身となり切ることである。〈世尊が最勝第一の菩提道場に住された〉、そして〈虚空の如き戲論なき無二の行境〉とは、仏と一体化する瑜伽のことである。また〈VA字で羯磨金剛薩埵と加持し、金剛最勝施とともに〉は、VA字が金剛薩埵（vajrasattva）を指し、また金剛部の種字で、白浄な水（vāri, varuṇa）を表し、水がすべてを

清浄に洗淨することを表したものと云える。そして〈加持する〉とは、阿闍梨自身も衆生済度の作業（karma, 羯磨）をなす羯磨の金剛薩埵（karma-vajrasattva）となり切ることである。このことは瑜伽行を実践する者に成ることを意味している。このように金剛薩埵の定義に関わる、本初、本不生、最勝第一、寂靜、堅固、不顛倒、空性等の重要語が、『大日経』に存在しており、次の瑜伽タントラにおいて増幅・展開されていると言える。

2.7 以上のことから、『大日経』は『金剛頂経』を始めとする瑜伽タントラ系への連続性を示している經典であるとの点からも言えるであろう。

3. 『大日経』における金剛薩埵をまとめてみると、阿闍梨は、大乘真言道を進趣する者であり、釈尊の菩提道場での如く、大悲心をもって衆生済度せんという不退転にして堅固なる誓願を持つ者である。そして衆生を救うために菩提心の種子を植えつける者のことである。『大日経』の『住心品』にある「大悲とは方便であり、それが根本となる」とは、悲が衆生済度（paritrāṇa）という本誓（samaya）を持つことを表し、三摩耶薩埵とは、誓願を持つ人のことである。これは悟りの菩提心に向かわしめる般若の智慧を持った人、そして果たる般若と因なる方便を持つ人が、金剛薩埵であり、常に同時に因と果が作動する人のことである。般若、すなわち空の立場を根底に持ち、無我になって、しかも悲あるが故に、この境地（果位）にも留まらず、因の世界、すなわち現実の世界へと向かっている者である。この両方を持っているが故に、金剛薩埵と言われるというのが、『大日経』における金剛薩埵と言える。

-
- 1) 大正 18, 22b16-18 2) 北京 No.126, 155b7-8 3) 北京 No.126, 156a5-6: 大正 18, 22b29-c1 4) 北京 No.126, 156a6-8: 大正 18, 22c2-4 5) 北京 No.126, 156b7: 大正 18, 22c18-19 6) 北京 No.126, 156b8-157a1: 大正 18, 22c20-22 7) 北京 No.126, 152a6-7: 大正 18, 21b2-3 8) 北京 No.126, 157a1-2: 大正 18, 22c22-23 9) 北京 No.126, 157b5-6: 大正 18, 23a25-28 10) 大正 18, 5c9 11) 北京 No.126, 127b1 12) 北京 No.3490, 58a8-b1 13) 北京 No.3490, 62b8-63a2

〈キーワード〉 大日経, ブッダグヒヤ, 金剛頂経, 金剛薩埵

（佛教大学大学院）

Vastu appears as the base of verbal denominations and as a verbally inexpressive thing in the *Yogācārabhūmi*, especially in the *Tattvārtha* Chapter of the *Bodhisattvabhūmi*. In the *Viniścayasamgrahaṇī*, *nimitta* appears in the same position as *vastu*. Furthermore, these are connected with the Three-nature Theory. In this paper, I have tried to investigate *vastu* and *nimitta* in the connection with the Three-nature Theory.

I have investigated the Three-nature Theory in the *Madhyāntavibhāga-bhāṣya* before. From that investigation, I found that the structure of the Three-nature Theory in the *Madhyāntavibhāgabhāṣya* is different from that in the other texts of the *Yogācāra* School. Generally, the structure of the Three-nature Theory is thought to be that *paratantra-svabhāva* is a locus of *parikalpita-svabhāva* and *pariniṣpanna-svabhāva*. But in that text, that locus is *pariniṣpanna-svabhāva*. In my opinion, Vasubandhu, who is the author of that text, may possibly be influenced by another text which was written before the *Madhyāntavibhāgabhāṣya*. Through an investigation of *vastu* and *nimitta* in the *Yogācārabhūmi*, it appears that there is a possibility that Vasubandhu was influenced by the Three-nature Theory of the *Yogācārabhūmi*.

82. The Position of Vajrasattva According to the *Mahāvairocanaṅghisambodhi-vikurvitādhiṣṭhānavaipulyasūtrendrarājanāmadharmaparyāya*

Tatsuto HIRAOKA

83. On the *Kāyatrayastotra*

Akimasa TSUDA

The *Kāyatrayastotra* (P no.2015) may be supposed not to have been written by Nāgārjuna, considering the meter, *Sragdharā*, and the terms for *Trikāya*, the set of which is not yet seen even in the earliest *Yogācāra* works, i.e. the *Bodhisattvabhūmi* of the *Yogācārabhūmi*, the *Samdhinirmocanasūtra* and the *Viniścayasamgrahaṇī* of the *Yogācārabhūmi*. It is possible, although we cannot prove it conclusively, that this *stotra* was composed before the estab-